

2011年9月17日

次世代人文社会学育成プログラム 帰国報告

アジア文化研究専攻 西アジア歴史社会専門分野 博士課程3年

小澤 一郎

研究テーマ:大英図書館、英国国立公文書館所蔵の19世紀イランへの火器と関連技術移入に関する史料の研究

派遣形態:個人派遣

派遣期間:2011年7月17日～9月3日

派遣先機関:大英図書館 British Library、英国国立公文書館 National Archives

今回の派遣では、自身の博士論文のテーマである19世紀イランへの火器と関連技術移入に関する研究のため、大英図書館と国立公文書館で関係文書の史料調査を行った。イギリスは、19世紀初頭に当時イランを統治していたガージャール朝へ外交使節を派遣して以降、イランにおいて時期による差はあれ一定の外交的プレゼンスを占めていたが、その影響力を背景として、イランへの火器や関連技術の移入に主体的に関与するほか、当時の状況に関する記録を残した。イギリスの対イラン政策においては、当初東インド会社 East India Company が大きな影響力を持ったが、19世紀中葉に至るまでの時期に徐々に外務省 Foreign Office に移管されていった。両者による外交記録はそれぞれ大英図書館と国立公文書館に所蔵されているが、これらの記録から主に19世紀後半の火器と関連技術移入に関するものを抽出するのが今回の調査の目的である。

大英図書館では、アジア・アフリカコレクションに所蔵されているインド庁記録 India Office Records の政務・機密書簡 (Political and Secret Correspondence with India, 1875-1911, L/ P&S/ 7)、インド外地域書簡 (Correspondence relating to Areas outside India, 1781-1911, L/ P&S/ 9) と政務・機密部門覚書 (Political and Secret Department Memoranda, L/ P&S/ 18) のうち、主に19世紀後半の文書について調査を行った。このうち、政務・機密書簡、インド外地域書簡に関しては冊子体の記録簿 registers (Z/ L/ P&S/ 7, Z/ L/ P&S/ 9) を閲覧し、関係文書のリスト作成を行った。また、政務覚書に関しても冊子体の目録を参照して関係するものをピックアップした。その上で、研究に必要となる文書をマイクロフィルムからの紙焼きという形で複写した。

国立公文書館においては、外務省文書 Foreign Office Records の政務他部門一般書簡 Political and Other Departments: General Correspondence のうち、イランに関係する文書群 (FO60) に関して調査を行った。この文書群も、大英図書館と同様に記録簿 (1890年までは FO605/ 146-150、1891年以降は FO566/ 875, 877) がマイクロフィルムあるいは冊子の状態で閲覧できるため、索引 (1890年までは FO605/ 150 巻末、1891年以降は FO804/ 36) も利用しつつ、19世紀初頭から今回研究対象とするガージャール朝ナーセロッデー・シャーの治世が終わる1896年までの文書について、特に19世紀後半を

中心に関係する文書のリスト作成を行った。同館では閲覧者自身がデジタルカメラで撮影する形での複写が許可されているため、リスト作成と平行して、関係する文書の撮影を行った。ここには、19世紀末から20世紀初頭にイギリスによって行われたペルシア湾における武器取引の取り締まりに関する文書(FO60/591)も含まれている。また、戦争省文書 War Office Records に分類されている1856年のイギリス軍によるイラン遠征の報告書(WO106/ 6275)、および19世紀後半に作成されたイランの軍隊に関する調査報告(WO106/ 184-187, 6276, 6277)も撮影することができた。

上記2館が閉館となる日曜日には、今回の研究に関連する施設を訪問した。具体的には、ロンドンの帝国戦争博物館 Imperial War Museum、王立陸軍博物館 Royal Army Museum、ロンドン近郊ウーリッジ Woolwich にある王立大砲博物館 Royal Artillery Museum を訪れることができた。このうち、ウーリッジは20世紀半ばまで王立造兵廠 Royal Arsenal が所在した地であり、今回の調査で収集した文書にも、同地に関連するものが多数含まれている。同地には当時の遺構も多数残されており、現地調査とはいかないまでも自身の研究対象を肌で感じることができ、興味深い経験となった。

今回の調査で収集した史料を量的に概観すれば、今回主な調査対象とした19世紀後半の文書についてはその大部分が国立公文書館に外務省文書として所蔵されていたもので、総ページ数1500以上に及ぶ。大英図書館のインド庁文書から収集できた文書は量にしてこの10分の1以下であり、しかもその大半は外務省文書の写しであった。ここからは、先述した対イラン外交における担い手の変化という全体的趨勢、および19世紀後半の火器と関連技術の移入に関する政策決定において、イギリス本国が東インド会社およびその後進たる英領インド政府に対して有した優越を示唆する事実として興味深い。

質的には、19世紀イランへのイギリスを中心とする西ヨーロッパ諸国からの火器と関連技術の移入について、その具体的な手続きやそれに付随する問題点について興味深い視点を提供する史料を収集できた。一例を挙げれば、19世紀後半のイギリスからイランへの弾薬輸出については、輸送の過程やそれについての本国からの指示、支払請求書、さらにガージャール朝政府の支払い遅延に際しての催促の書簡までが残されている。また、イギリス側史料である以上当然ではあるが、当時イランで活動した西ヨーロッパ出身者についても多くの情報が残されている。こうした史料はこれまでの研究動向において全く利用されてこなかったものであり、またイラン側史料も伝えていない情報を豊富に含んでいるため、当該分野における新境地を切り開いていく可能性を秘めている。

今後は今回収集した史料を既に収集済みのイラン側史料と合わせて研究を進めていく必要があるが、さしあたっては、イラン側でまとまった量の史料が現れ始めるモハンマド・シャーの治世(1834-1848)を対象として論文を執筆し、徐々に時代を下っていく形で研究を進めていく予定である。